わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―124―

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

ドバイの医療

ドバイといえば、映画の舞台としてもお馴染みの中東国。近いところでは、トム・クルーズ出演の「ミッション・インポッシブル」シリーズの最新作がある。世界一高いビル、ブルジュ・ハリファの外壁をトムがスタントなしでペタペタと四肢を駆使して移動するシーンが圧巻だった。

何しろ、オイルマネーのおかげで国が潤っていることから世界中の注目を浴びている。日本や他の国々のように、財政が悪化して四苦八苦している国とは大違い。教育も医療も無料で税金もなし、銀行の金利は20％以上と夢のような国なのだ。

仕事がら、魅力的なのは医療が無料という点だろう。少し前に訪問したキューバでも教育と医療は無料という触れ込みだったが、こちらはGDPが世界90位という貧しい国。無料化は、事実上キューバのトップであるカストロの理念を貫いた結果であった。

ドバイで暮らす地元人は約2割。ほとんどは外国人労働者であるが、医療については労働者もその雇用主が責任を持って保険に加入することになっているから、ほぼ同等水準の医療を受けることができる。これはひとえに健康上の理由で失業者やホームレスが出ないよう、治安を守りたい国家の意向を反映しているためである。聞けば、外国人も緊急の場合はある程度まで無料で医療を受けられると聞き、早速ガイドさんを調達して夜間の救急外来を訪れることにした。何ごとも百聞は一見に如かず、である。話だけ聴いていても本当のところはわからない。

観光に来ている日本人の私が、突然の腹痛に襲われて病院に飛び込んだ…という設定をあつらえた。時はすでに夜の20時過ぎである。イスラム教のドバイでは男女の棲み分けが厳しく、病院の待合室も男女別々。女性ばかりの部屋に座った途端、他の患者がいるにもかかわらず、すぐに受付に呼ばれた。パスポートを提示するように言われるが、とっさのことで持っていないと答える。すると、カルテを作るので名前と携帯の電話番号を書いてくれ、とのこと。言われるままにメモ書きすると、これまたすぐに診察室に呼ばれる。

熱と血圧を測り、簡単な問診を受ける。もちろんガイドの通訳を通してではあるが、それはそれは親切な看護師が不安のないように対処してくれた。聞けばフィリピンから来ているという、若い男性であった。ところが、話しているうちに私が単なる好奇心で来院しており、実はお腹など痛くないことがわかってしまったらしい。笑いながらではあったが、これ以上はドクターの診察と詳しい検査が待っており、数千円の費用がかかると言われ、辞退するに至った。（だましてごめんなさい、ドバイの方々）。

今でもドバイの病院に私のカルテが存在していることを思うと、ちょっと不思議な感覚に陥る。と同時にパスポート不所持の外国人を温かく迎えてくれた病院やそのスタッフにひたすら感動してしまった。

確かに、ドバイは噂通り超豊かな国だった。物価や立ち並ぶ家々、走っている車や人をみたら一目瞭然である。しかし今、私の心に残っているのは高層ビルでもきらびやかな街並みでもなく、病院スタッフの優しさと荒涼とした砂漠、そしてラクダの群れである。いったいこれから先どんな夢を見せてくれるのだろうと、ラクダの背で「月の砂漠」を口ずさんだ秋の夜を、懐かしく思う今日このごろなのである。

イラスト・伊藤栄章